

第52回造本装幀コンクール JAPAN BOOK DESIGN AWARDS 2018 受賞者インタビュー（対 談）

篠原紙工 バインディング ディレクター

篠原 慶丞 氏

×

装幀家

小池 俊起 氏

今回の造本装幀コンクール受賞者インタビューは、文部科学大臣賞を受賞した「池内晶子 | Akiko Ikeuchi」のブックデザインを手がけた装幀家の小池俊起氏と製本を担当した篠原紙工の篠原慶丞氏の対談インタビュー。篠原紙工に絶大な信頼を寄せる小池氏と、「本」は作品の思いを届けるためのひとつの媒体と捉え、デザイナーとの作品イメージの共有を何よりも重視する篠原氏。作品が伝えたい思いをどうブックデザインに落とし込み、「本」という媒体でメッセージを伝えるのか。受賞作品の制作過程について二人に話を聞いた。

小池：今回の受賞者インタビューは、当初僕一人でお受けする予定だったのですがデザイナーの視点だけから話すよりも、ともに本の制作に携わった人とお話したほうが面白いんじゃないかと思って、対談形式を提案させていただきました。受賞作として選出いただいた『池内晶子 | Akiko Ikeuchi』は、著者である作家はもちろん、編集者や版元、印刷会社など多くの方々の密な協働によって実現したのですが、特に製本をご担当された篠原さんとお話させていただきたくかったので、お願いしました。

まず僕が今回の仕事を篠原さんをお願いした経緯からお話しさせていただきます。僕は最近、美術作家の作品集を手掛ける機会が増えたのですが、その際、規格化された書籍作りのプロセスに則ってやるのではなくて、設計の段階から、その作家の作家性や作品性に適合する本を作ろうと考えるんですね。そうすると自然と、通常の書籍制作のプロセスにはない、特殊なオーダーを製本会社さんや印刷会社さんにすることになるんです。デザイナーとして僕がこういう本を作りたいと言ったとき、その意図や意味を理解してくれる製本会社さんは、経験上まだあまり出会ってなくて。当然ですが、製本会社の目線での本の見方と、デザイナーの目線での本の見方は違ってきます。しかし、篠原さんは最初にお会いしたときから、どちらの視点も持っている人だと思いました。デザイナーの言葉を理解してくれるという点で

文部科学大臣賞
『池内晶子 | Akiko Ikeuchi』

出版社 / gallery21 yo-j
装幀者 / 小池俊起
印刷会社 / 錦サンエムカラー
製本会社 / ㈱篠原紙工



左：小池俊起氏／右：篠原慶丞氏

篠原さんを信頼していて、今回の作品集についても篠原さんをお願いしました。

今回の受賞作は、美術家の池内晶子さんの作品を紹介している本ですが、造本上の特徴は帯にあります。池内さんの作品のほとんどは、絹糸を用いて空間を構成するインスタレーション作品です。絹糸で編まれた立体は、展示空間の壁を支点に固定され、まるで宙に浮いているように静止し、空間を支配します。そういった池内さんの作品が持つ緊張感や反重力的な浮遊感、さらには鑑賞者の作品体験そのものを、何かしらの方法で本の中に持ち込みたかった。一方で、一般的な本の中で、重力を顕著に感じる要素は何かと考えたときに、「帯」というのがアイデアとしてでてきた。帯が、地揃えでも天揃えでもなく、中途半端なところで固定されている本があれば、読者はそこに（通常の本とは違う）何かしらのメッセージが含まれていることを感じると思うし、それが装幀の文脈で池内さんの作品性を表すことになるんじゃないかと思って。でも製本のことは詳しくはないので、それが技術的に実現可能かどうかを、まずは篠原さんに相談しました。

ここで篠原さんにお聞きしたいのですが、帯をこのような位置に固定させることについて、どのようにお考えになりましたか？

篠原：僕がデザイナーさんと相談させていただくときは、「寸法は

何ミリですか？」といったスペックよりも僕がいつも重要だと思って聞くことは、「なんで帯をこんな中途半端なところに置くの？」「なんで、これは白なの？」などといった、デザイナーさんがどういうコンセプトをもっているかということなんです。製本屋ですから本を作ることは我々の役割ですが、本来の目的を掘り下げていくと、極論本でなくてもよくて、池内さんの世界観を伝えてそれを共有したいという気持ちが第一にある。それを今回は本という媒体を使って実現したいという思いがあり、デザイナーも製本屋も同じ思いを共有した。そしてそのための具体的な仕様として、ドイツ装という製本方法がいちばん最適ではないかというところに落ち着いた、という手順なんです。つまり重要なのは、本をつくること自体が目的になるのではなくて、本という媒体の上に何をつくりたいのか、何を表現したいかということをデザイナーと製本会社が共有することだと思います。その結果として、このデザインが理に適っているとすれば作るんです。

今回の作品集は小池さんから頂いた仕様から軌道修正をしていません。具体的な仕様ができていましたから。ただ帯についてはなんでこんな位置にあるんだろうと思いました。でも小池さんは、池内さんの作品は重力を感じさせない作品だから、装幀でもそれ表現したいと明確に伝えてくれて、その意味や意思に納得いったんです。“重力を感じさせない”ということを聞いて、本作品集のデザインに迷いなく納得した。僕にとっては、かなり理想形の進め方でした。小池さんが「重力」というコンセプトをきちんと説明され、納得できたので、本当の意味で楽しかった。あとは細かいことの調整でOKだった。今回は、一回目の打合せでかなりイメージが共有できましたよね？

小池：そうですね。イメージの共有はすぐにできましたね。あとはそれを実現するために細部をどうするのかということだけでした。

篠原：この帯を表紙の天揃えでも地揃えでもない、微妙な位置に付けるための方法は二、三案あったんですよ。作業しやすい、しにくいがある。作業しやすい方法だとコストが安く抑えられる。作業がしにくい方法はやはりコストがかかる。ほかにはクオリティコントロールの問題があって、商品の出来上がりが安定している方法と、僕ら目線で少々バラツキが出てしまう方法とを、どうやって天秤にかけるかという課題がありました。

小池：いくつかの選択肢がありました。帯を表紙と見返しの間に巻き込むことがまず決まりました。

篠原：そうです。帯を巻き込まずに見返しの上から貼付けることは簡単にできますが、でもそれじゃ、後付け感が出てしまう。

小池：見返しの上から貼付けるのは、設計の意思が弱く見えちゃうと思ったんです。普通のドイツ装として完成したものに、

後から帯を付けたという見方も可能になってしまう。つまり、初めてからこうしたいという意思があって、そのために本全体が設計されているという態度を示したかった。なのでリスクはあるけれど、“帯ありき”の造本として成立させるため、帯を巻き込むという選択をしました。

篠原：僕はわりとデザイナーと製本屋の両方の目線をもっているタイプなんです。製本会社がデザインを提案してもいいと思っているし、篠原紙工はデザイン会社でもあると思ってる。

小池：そうですね、篠原さんとはまずデザインの話から仕事ははじまる印象です。

篠原：でもデザイナーの思いを理解しようと働きかけ、設計段階から装幀にかかわるというスタンスの製本会社って少ないんですよ。極論を言ってしまうと、例えば、デザイナーさんから相談がきたときに、イメージがわかったら「じゃ、こういう装幀にしたら？」って持ち掛けて、装幀アイデア料を何万円かもらって、「あそこの製本会社さんがいいよ」って他社を勧めるみたいなやり方もできるかもしれない。それでもそこに僕たちの存在価値はあると思っていて、やりがいを感じることもできる。でも現実的にデザインを理解しながら仕事をしている製本会社は少なく、篠原紙工はたまたま僕がデザインに興味があるということもあり、デザインについて考えるようになったんですね。当たりまえですが、デザイナーの人たちは製本の技術的な知識が少ないので、理想とする装幀が実現可能か不可能かの二択で考えてしまう。製本会社の担当者も、デザイナーのオーダーを自社でできる、できないの二択で判断するのではなくて、きちんとデザイナーの意図するところを理解してあげられれば、デザインと一緒に考えて、仕様書や造本設計を作るところまで行い、その先の実際の製本は、極端な話、他社の工場を紹介するってこともできないんですね。

小池：他社を勧めてしまうという考え方はすごいですね（笑）

篠原：とはいえ、うちもこれだけの工場を持っているわけだから、よりお互いの満足度を高め合えるところまでもっていきたい。だから、篠原紙工でやるのであれば、デザイナーの思いをしっかりと聞いて、多少のリスクを背負ってでも、よりコンセプトに合った装幀を実現させたい。今回の帯の設計については、やはり外に貼付けるよりも中に巻き込もうとなりました。先ほどの話にもあったように、中で巻いた方がデザイン的な意図にかなっていたんです。でもその反面、リスクも背負うことになる。でもそこに意味があると思ったから、小池さんと結構早い段階で「中に巻き込もうよ」って話になった。というか、中に巻き込む前提で話が進んでいった。——中に巻き込むことのリスクについてもう少し具体的に聞かせてください。

篠原：この帯は、表紙と見返しの間に巻き込まれているため、帯を付けた後から小口の仕上げ断裁をすることができません。表紙と本文を先に仕上げ、最後に帯とともに手作業で一体にしなければならない。そうすると、小口がツライチにならないこともあり得てくる。さらに、この帯は巻き込まれている部分でしかくっついていないんですね。表紙に直貼りしていない。なので、帯自体がズレたり曲がったりするリスクもある。でも池内さんの作品の緊張感や、その世界観を出すためには、仕上げ断裁ができなくても、あらゆる直線をびしっと揃えたかった。池内さんのインスタレーションの世界観を出すには、きちっと出た角だとか、計算し尽くされた付まいが必要だなと思ったんです。なので、1ミリの誤差も許されなかったし、許しなくなかった。非常に細かいレベルでの調整が必要となりました。

小池：ありがとうございます。

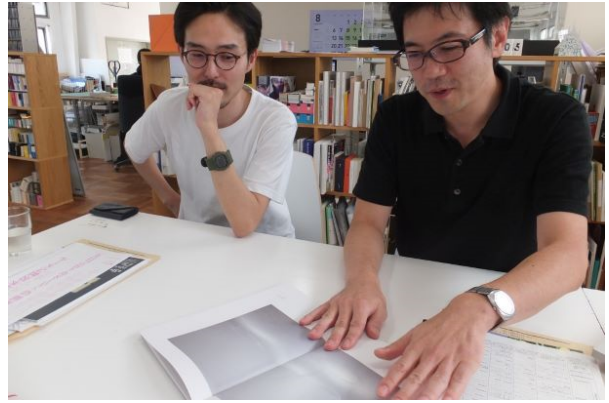
篠原：このような細かな箇所、仮に仕上げが甘くても、製品になった時にお客様がそれに気づいてクレームになるとかいうレベルのものではないんですね。ただ、それがそのままお客様にとっての本の印象になってしまうので、自分たちにとっては、本当に伝えたいことが伝わらない、誤解されてしまいかねないというリスクがあります。

小池：クオリティコントロールについて言えば、篠原さんによい、デザイナーがどうしてもここにこだわっているのかという、コンセプトに関わる部分を理解してくださると、今の話にあったような、デザイナーでは想定できない細かな問題が現場でおこったときに、コンセプトに立ち返って正しい判断が可能になる。目的が理解されないまま、ただ単に巻きたいだけ、というかたちだけで理解されてしまうと、製本会社としては踏み込んだ判断ができなくなります。その点篠原さんと、僕が気付かない細かいリスクまで想定して、しっかりと言葉で説明してくれる。そしてそこでまた対話ができる。それは本当にありがたいと思っています。

篠原：確かに数ミリの寸法がずれると世界観が変わってしまうという話は打合せの段階ではしてないんですね。一般的には、発注者側のデザイナーがクオリティの部分にどんなリスクが潜んでいるということがわからない場合は、現場もリスクを負わない方法で進めてしまって、デザイナーが完成品を見て初めて「そうだったんだ」と知るということもあり得るわけです。

小池：本当にそうなんです。細かいところのリスクまでデザイナーは知らないですから。大半は製本会社さんに任せるしかない。

篠原：やはり予算の問題もあり、時間の問題もあり、そういったことを考えると、お互いに防波堤を作り始めるんですよ。そうすると今回の作品集だって画一的な本になってしまったかもしれない



んです。でもリスクまで含めてお互い共有しあうことで、やりたいものの、作りたいものができるんじゃないかと思って、いまのこのスタンスで仕事をしています。何としてでも自分たちのできるところで、お互いが納得するベストなものを作りたい。

——ほぼ一回の打ち合わせでそこまでイメージを共有し、完成までにもっていったんですか？

小池：僕はわりと変わった本を作ることが多いので、ひとつの案件で何度も製本会社に通うみたいなこともあるんです。打ち合わせも三、四回やることもしばしば。でも、篠原さんとの仕事では、電話のみで一回も打ち合わせに行かなかったときもあります（笑）。今回の作品集も珍しいオーダーをした割にはかなり少ない時間で完成までのイメージが共有できた。そして本当に仕上がりの精度が高かった。僕の知らないところで細かな判断をしてくださっているからだと思います。クオリティに関しては手堅い。だからいつもお任せしてしまうんです。

篠原：思いに叶うものを作りたいので、仕上がりのクオリティのせいでもそこが崩れてしまてはいけない。技術的なクオリティについてもやはりきちんとやっていきたい。実際は僕じゃなくて現場のスタッフたちが手を動かすんですけど、スタッフにも打ち合わせに出てきてもらって、その時の本のコンセプトや設計の意図、なぜそのデザインになったかということもきちんと伝えるようにしています。そうするとスタッフも最初から妥協したモノづくりはしなくなる。

——ありがとうございます。この作品集が、両者のイメージの共有、コンセプトを伝え、そして理解し、形にしていける、というステップを見事に成し遂げられてたということがわかりました。そうして出来上がった「本」ですが、今の時代だと我々が能動的に「本」を求めない限り、本にかかわる頻度が非常に少なくなってきた。このような時代の「本」とは、どのような存在なのでしょう？

小池：“モノ”であるということが重要だと思います。プロダクトは一人じゃ作れない。ウェブデザインや電子書籍の組版など、最終的なアウトプットが電子メディアの仕事では、比較的少数数の関わりで作り上げることが可能だと思うのですが、本というプロ

ダクトは、出版社や印刷会社、製本会社、ほかにも紙や箔などの素材を扱うメーカーだとか、いろんな人の手を借りないと作れない。それって裏を返すと、僕一人でコントロールできないところでモノが出来上がっていくという面もあって、予想できない結果が出てくる。本は、その点でモノづくりとして面白いと思っています。——確かに、関わる人が多ければ、いい意味でも悪い意味でも予期しなかった結果が出てくることの面白さがありますね。モノとしての本の面白さには、ほかにはどのようなことが挙げられるのでしょうか？

小池：本ってページをめくっていきますよね。何気なくめくりながら読み進めてしまう本でも、実はめくるごとに世界が切り替わる体験をしているはず。ページをめくるごとに、物語性生まれてくる。作り手の視点から見れば、そこに演出をする余地があるんですね。演出というと映画鑑賞や観劇との類似点もあると思うんですが、本にはそれを自分の手で繰ることによって展開させていくという面白さがある。視覚的な体験だけでなく、紙の触感やインキの匂いなどの総合的な感覚で、物語を体験できるのは面白い。そういう演出をデザイナーが積極的に設計の中に盛り込むことで、まだまだ見たことない本の世界を見せられるんじゃないかと思ってやっています。

——篠原さんはいかがですか？

小池：篠原さんは紙の本への強いこだわりってあるんですか？
(笑)

篠原：極論、本にこだわる必要はないと思ってる。そういう風に感じます？

小池：もっと根本的なものを見てるんだろうなと。本にこだわるというよりは、本というメディアを使った時に何ができるのかということとで考えていますよね。なので目的がずれていったときに、メディアごとずらせていけるタイプだと思います。

篠原：そうです。紙とか本へのこだわりはない。本が好きという意味でのこだわりはあるけど。普段PCだし、スマホ、タブレットがあれば事足りる。極論、紙がなくなっても何も不自由はない。でも、自分はこの業界の中で生まれて、この業界のエネルギーで作られているという感覚があります。小さいころから読書も好きだったので、この業界が衰退していくかどうかという問題に対しては、本がなくなる、なくならないではなくて、本をなくさないためにはどうするのかを考えていきたいですね。

ありとあらゆる面で、紙と電子デバイスを比較したときに、一長一短ではありますが、総合点では電子デバイスの方に分があると思っています。でも、「ここは、紙の本の方がポイント高いよね」というところがあって、そこを突き詰めていく必要がある。例えばそ

のひとは所有欲。好きな作家の本を所有したり、その人の全集が自分の部屋に並んでいるだけでうれしいんですよ。キンドルでも全巻コンプリートはできるけど、人間って狩猟時代から狩った動物の骨を装飾品とかにして、物質としてとどめておきたい習性があると思うので、より所有欲を満たしてくれるのは紙の本だと思います。あとは、情報の伝達の観点で言えば、電子デバイスは出力の大きさは可変だし、3Dなどの新しい技術も増えてきて、視覚伝達の質や多様性では圧倒的に紙に勝ります。でも伝える情報って視覚からだけではなくて、今回の作品集で言っても、本の全体を通して伝わる緊張感や空気観みたいなものがあって、そのために意図されたデザインがあって、こういった感情や感覚を伝達する、あらゆる要素を落とし込めるのは紙の本の特権だと思います。紙という物質があるからできること。紙は電子に負ける部分はあるけど、こういった紙の強みの中で、今まで80点だったものを90点、100点とポイントを上げていけばいい。

小池：電子書籍ってまだ紙の書籍を模倣している段階ですよ。ページをめくるモーショングラフィックが紙のそれを模しているものがあったり、まだ電子デバイスとしての固有の見せ方やインターフェイスを持っているものは少ない印象です。でもあつという間にそういった独自性が誕生し普及してくると思います。そうすると、紙と電子の対比という話ではなく、全く別物として存在できるんじゃないかと思うんです。そうしたら逆に本の価値も上がってくるかもしれない。

篠原：テレビとラジオみたいなもんですよ。ラジオだから言えちゃうみたいなこともあるでしょ(笑)。紙を加工する技術を持っているのが製本会社。今は「本」でその技術を発揮しているけど、例えば紙コップとかでもいいわけですよ。電子デバイスの設置領域が広がる中で、本の目的そのものや存在価値そのものの再定義も必要になってくると思う。

——ありがとうございます。最後にこの作品を手にとった人たちへのメッセージをお願いします。

小池：読めば読むほど、池内さんの作家性が体感できる作品集になったと思うので、繰り返し読んでいただきたいです。

篠原：造本装幀コンクール受賞作という目で見てもいい。池内晶子の世界観を感じてもらうための本なので、造本の観点で見る必要もないと思います。中の作品をいっぱい見て池内さんの世界観を感じてもらいたいですし、我々作り手としては、作家の世界観を読者に伝えることが最大のミッションで、この作品集はそういう意味では成功していると思っています。上から目線かもしれないですが、そういう目的で作られた本としてはひとつのお手本になっていると思います。